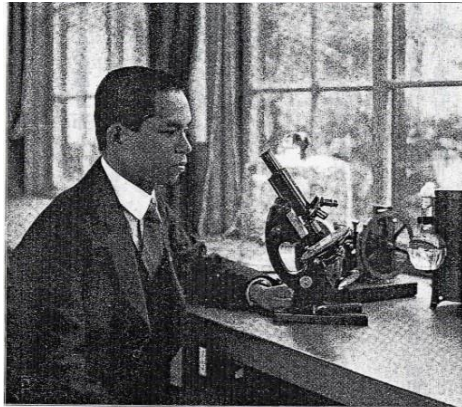


# 佐藤清明資料保存会会報

No. 9



博物学者 佐藤清明 (1905-1998)

佐藤清明資料保存会  
里庄町立図書館

2022.11.19

## 会報第9号 もくじ

1. あいさつ	佐藤清明資料保存会副会長 高田 正信	1
2. 巻頭論考 『歩兵第十連隊に送る歌』の背景にあるもの	才野 基彰	2
3. 三徳園の‘菊桜’植樹について	稲田多佳子	10
4. 横溝熊市特別展示		13
5. 岡山文庫「佐藤清明の世界」刊行記念講演会		13
6. 里庄のせいめいさん展 2022		14
7. 編集後記		16

表紙写真：第六高等学校理科教室助手時代の佐藤清明（20代）

## あ い さ つ

昨年の令和3年4月、図書館長の仕事がスタートして3日目、令和3年4月3日に佐藤清明資料保存会の理事や役員の皆様と初めてお会いしました。失礼ながら自分より一回りご高齢と思われる皆様が、一人ひとり活気に満ちあふれ、意見をたたかわせながら4月の清明研究会の活動内容について話し合われる姿に、ただただ驚くとともに、その活動意欲、熱い志、強い熱意、そして、たくましい行動力に、完全な脱帽状態だったことを鮮明に記憶しています。

コロナ禍で緊急事態宣言が出ている中、6月の理事会と総会は文書での報告形態を取らざるを得ませんでした。清明を読む会を遅れ遅れになりながらも、皆様のお力添えのおかげで、予定していた5回全てを実施することができました。また、その活動と並行して岡山文庫『博物学者 佐藤清明の世界 附録「現行全国妖怪辞典」』を5月から10月までという、とても短い期間に作り上げる離れ業をやり遂げる様子もつぶさに見せていただきました。

さらに、令和3年12月中旬からは、かねてから加藤会長よりお勧めのあった福武教育文化振興財団の2022年度活動助成を‘菊桜’の保存育成に的を絞り、わずか1ヶ月後の令和4年1月には、申請書や活動計画書等の書類を作成し申請を行いました。そして、財団より3月23日に正式に認定を頂きました。令和4年度に入ってから、菊桜育成保存会としての皆様の意欲的活動により、‘菊桜’の開花から成長の記録、草取り・水やり・施肥などの養生、のぼり旗・パンフレット・看板の作成設置等、順調に進んでいます。

この会報第9号には、第1回清明を読む会「『歩兵第十聯隊に送る歌』の背景にあるもの」で、清明研理事才野基彰さんの調査研究により明らかになった清明さんの人柄や業績、交友関係についての論考が掲載されています。さらに、清明研顧問稲田多佳子さんの三徳園の‘菊桜’植樹までの経緯、そして、里庄町歴史民俗資料館事業「横溝熊市顕彰展示」、岡山文庫「佐藤清明の世界」刊行記念講演会、今年度の里庄のせいめいさん展の様子も掲載されています。

このように、精力的に活動されているこの会に参加させていただくことができた幸運に感謝しながら、微力ながら事務局として、皆様の足手まといにならぬようお助けできたらと考えております。佐藤清明資料保存会と菊桜育成保存会が一步一步着実に前進していけるよう、今後とも皆様のご指導ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

佐藤清明資料保存会副会長

高田 正信

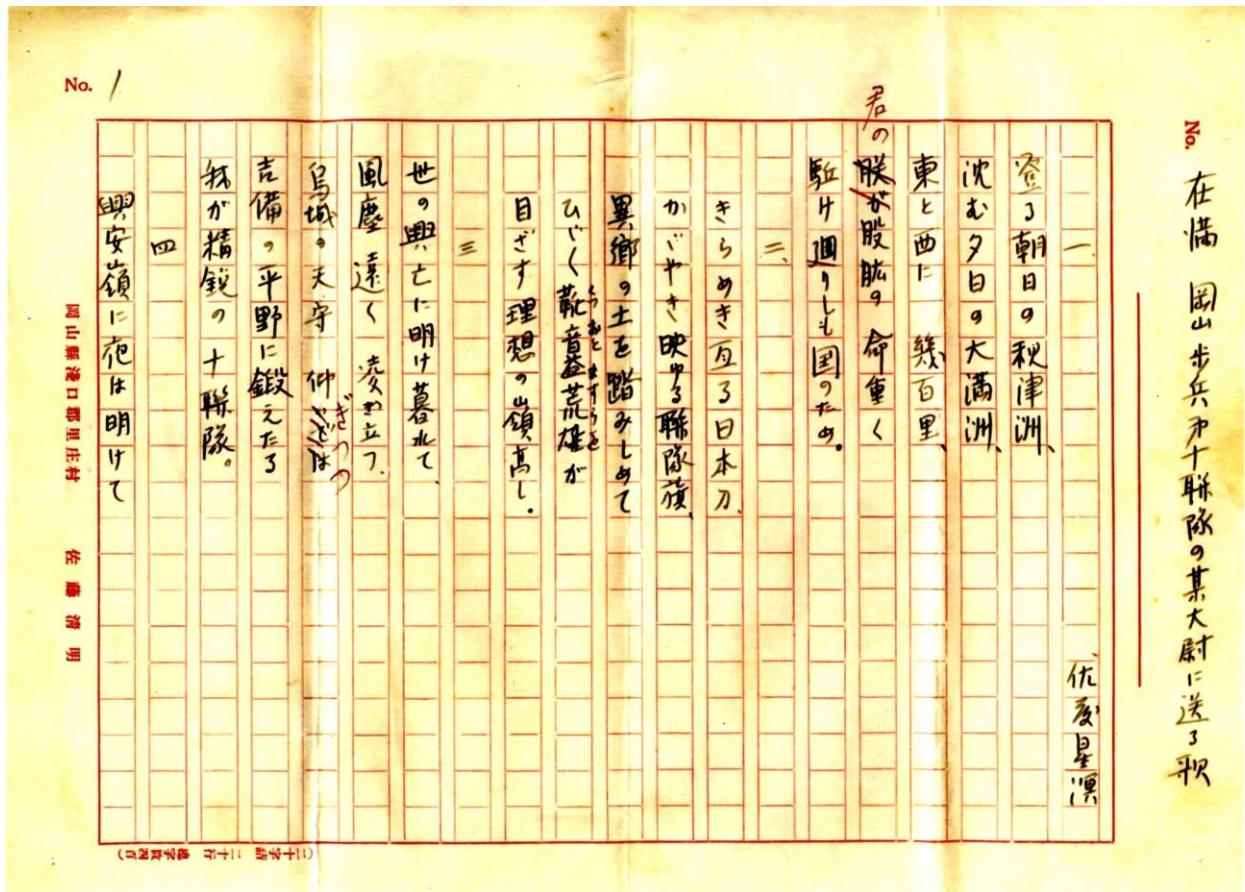
# 『歩兵第十連隊に送る歌』の背景にあるもの

才野基彰

この話は、清明さんの人柄、学問を通しての人間の繋がりのようなものを辿って、そして新たな清明さんの一面を探って見たいと言うところから始まる。楽譜発見は、平成 29 年（2017）年佐藤清明資料のデジタル化作業の最中であった。

佐藤星溟作詞、松田新治作曲「歩兵第十連隊に送る歌」。歌詞と楽譜(P.8~9)を見ながら、口遊んで頂きたい。

さて「佐藤星溟」とは佐藤清明の筆名だが「松田新治」とは、誰なのか歩兵第十連隊にどのような縁があったのか、調べ始めたある日のこと 佐藤家の書簡類の中から歌詞の元原稿が出てきた。



土井晩翠による添削（赤ペン）を受けた歌詞の原稿（全3枚の内1枚目）

清明さんが書いた返信用封筒と原稿用紙三枚に十番までの歌詞が綴られており、詩人の土井晩翠が赤字で加筆修正し、返信したようである。

晩翠による加筆が認められる歌詞の内 一番、四番、五番、六番、七番、十番について次のとおり検証した。なお、消去線及び括弧内が晩翠の加筆である。

在満 岡山歩兵第十聯隊の某大尉に送る歌

佐藤星溟

- 一、登る朝日の秋津洲 沈む夕日の大満洲 東と西に幾千里  
朕が（君が）股肱の命重く 駆け廻りしも国のため。
- 二、きらめき亘る日本刀 かゝやき映ゆる聯隊旗 異郷の土を踏み  
しめて 響く靴音益荒男が 目指す理想の嶺高し。
- 三、世の興亡に明け暮れて 風塵遠く凌ぎ立つ 烏城の天守仰小  
ずは（ぎつつ） 吉備の平野に鍛えたる 我が精銳の十聯隊。
- 四、興安嶺に夜は明けて 高粱萌（芽）ぐむ朝ぼらけ 仰ぐ残月朶わねど（義は金鉄の堅  
うして） 鴻毛軽き我が命 消えて果てなむ原の露。
- 五、平和を願ふ極東を 太平洋は壽けど 崑崙嵐し幾度か 吹きては反す南北江（黄）河  
の水は澄みやらす。
- 六、聖賢の骨地に泣きて 仕（道）義の鏡塵に満ち（曇りはて） 荒涼（咆哮）遠く風啼  
（吹）けば 忽ち襲ふ大匪賊 教へも空し二千年。
- 七、零下三十冬寒く 塹壕深き陣営に 結ぶも淺ま（難し） 夜半の夢 銃声絶えてまどろ  
めば 枕辺淡し父の影。
- 八、あゝ南満の草みどり 爾靈山下の忠魂碑 軍の守と祀られし その赤心の魂は 再び  
咲きぬ紅に。
- 九、泰山重き君の命 櫻咲く国春たけて 南と北に父と子は 東亜に春を残すため 咲て  
散りなむ武士の花。
- 十、（天には雲をつんざきて） 爆音高き愛國機 小なとく空を仰ぎ見ば（地には） 歴史  
の色を鞣がえし（染めて） 總のみ残す聯隊旗 三たび朝日に匂ふかな。（終）

晚翠による加筆が認められる歌詞の検証

『在満 岡山歩兵第十聯隊の某大尉に送る歌』 佐藤星溟

- 一、登る朝日の秋津洲 沈む夕日の大満洲 東と西に幾千里  
朕が（君が）股肱の命重く 駆け廻りしも国のため。

検証その1)

「朕」は天皇のみの自称であり、晚翠はこれを「君」と訂正し、一人称から、二人称とした。また、「股肱（腹心）」としての行動は「国」のためであるとしている元原稿に対し、その後の「歩兵第十聯隊に送る歌」の歌詞では「国」



を「君」にしていることに注目したい。

四、興安嶺に夜は明けて 高粱<sup>こりやん</sup>萌（芽）ぐむ朝ぼらけ

仰ぐ残月<sup>ねど</sup>変らねど（義は金鉄の堅うして）

鴻毛軽き我が命 消えて果てなむ原の露。

検証その2)

「興安嶺に夜は明けて」とは、満州国の北東内モンゴルと黒竜江省にかけて延々と連なる山脈と大平原に高粱（モロコシ、タカキビとも言われる）芽吹く満洲の夜明けを歌っている。

話は脱線するが、私は「昭和20年8月15日にあなたは何処で何をしましたか？」という聞き取り調査をしたことがあった。質問の中で当時印象に残る食べ物第1位は高粱だったのである。根は地中深く伸びて、吸水能力が高いため乾燥にも強い穀物とされている。

また、司馬遷『報任少卿書（じんしょうけいに、ほうずるしょ）』の「死は或いは泰山より重く或いは鴻毛より軽し」を引用した語句も併せて新国家建設の原動力と命をも捨てる覚悟を示す一節である。

五、平和を願ふ極東を 太平洋は壽けど 崑崙<sup>こんろん</sup>嵐し幾度か

吹きては反す南北 注（黄）河の水は澄みやらず。

検証その3)

「崑崙（こんろん）」とは中国の西方チベットの北、黄河の源で仙女が住むという伝説の山であり、暴れ川で有名な黄河（原案では「江河」つまり揚子江と黄河を含めた大陸全土の河を想定）も、弛まぬ活動と強さを読みとることができ、厳しい気象条件の中でも肥沃な台地を以て極東の平和に貢献できると言う意味ではないかと解釈している。

六、聖賢の骨地に泣きて 仁（道）義の鏡 塵に満ち（曇りはて）

荒涼（咆哮）遠く風啼（吹）けば 忽ち襲ふ大匪賊 教へも空し二千年。

検証その4)

「聖賢の骨」とは、聖人や賢人が残した教えであり、「匪賊」と呼ばれる武装組織の蛮行と繰り返す野獣のごとき「咆哮」を哀れと表現している。

七、零下三十冬寒く 塹壕深き陣営に 結ぶも淺き（難し）夜半の夢

銃声絶えてまどろめば 枕辺淡し父の影。

検証その5)

満州では、零下46度の記録もあるほどで塹壕の中の睡眠は「淺き」の表現ではなく、より困難である「難し」と修正している。祖国の親を思う気持ちが表現されている。

十、（天には雲をつんざきて）爆音高き愛國機 いなく空を仰ぎ見ば（地には）歴史

の色を鞣がえし（染めて） 總のみ残す聯隊旗 三たび朝日に匂ふかな。（終）  
検証その6)

激戦を潜り抜けてきた為に旗の周囲のみが残り中心部分は焼け落ちた連隊旗、「三たび朝日に」の三度とは、日清、日露、そして満州での戦いを指しているのではないかと。そして友軍機の活躍にも期待しながら、戦に臨む意気込みを示している。

## 「某大尉」について

この歌のタイトルに話を戻す。「某大尉」とは誰か。数日して、謎が解けた。清明書簡の中から「在満 山本茂雄大尉慰問の夕」という葉書が出てきたのだ。岡山市内にある「禁酒会館」（国の文化財指定として現存）にて開催しているが、その発起人は佐藤清明他2名で山本茂雄大尉との交流は柳田国男の座談会が発端だったことも判った。その記念すべき座談会の写真【画像②】を紹介する。『岡山文化資料 下巻（桂又三郎著）』に掲載された写真で、柳田国男を囲んでの土俗座談会（昭和6年4月15日）前から2列目右端の軍服姿の男性が山本茂雄氏「柳田国男先生の座談会の際に始めて大尉を知・・・」と清明さんが述べているので、これが山本大尉との初対面の日であったようだ。（場所は岡山市西大寺町の明治製菓支店）



柳田国男を囲んでの土俗座談会（昭和6年4月15日）  
前列左端 佐藤清明，左から3人目 柳田国男，右端 桂又三郎，  
後列右端 山本大尉

山本茂雄とはどのような人物だったのか。更に20通程の読解困難な書簡を調べていくと、この歌に対する礼状が、昭和7（1932）年6月26日付け<sup>はるびん</sup>哈爾濱消印の絵葉書（ハルピン停車場風景）にて届く。満洲から6通目の郵便物でその殆どは慰問品に対する礼状である。その後も書状のやり取りは続くが、昭和8（1933）年6月22日消印の書簡は、「岡山市六高 佐藤清明殿（文面概要）博物科叢書 一 右陣中慰問として御恵投賜り

重々御礼奉申上候 尚苔の標本共々 採集可仕候も本務の余暇なれハ マンマンデー（慢慢的は「ゆっくり」）に願度為余り大なる期待を繋がれ候事少々迷惑の感あれ 御了承願上候 拝具 六月吉辰 山黙石 清明学兄」今風に訳せば「博物学叢書を頂き有難う。苔の標本を期待しているようだが、命がけの戦争に来てるんで植物採集に来ているわけではない。ちょっと迷惑だよ。」清明さんの慰問袋を覗いて見たいものである。

しかし、山本大尉の昭和8（1933）年8月1日消印の封書について中身の一部を読むと、

暑中 御機嫌御申上げ候 沈黙將軍  
黙二凱旋 皆登死し滿蒙の任地 苦熱三十  
度 黒旗遙々垂る 時局 愈々（いよいよ）  
難宣 緊禪（きんこん）一番 星溟雅兄 黙生  
七月二十九日」  
（同封の電文用便箋）  
滿洲一の植物権威者植物権威者  
一 奉天教育専門学校 大賀一郎  
純植学 理学博士（東大）滿  
洲に足跡  
二 旅順高女教諭佐藤順平（ママ）  
滿蒙植物図鑑の著者  
右両先生二昭一 ■ ・ ■ 度所設大ナルアラン  
「トン化」 牡丹江」附近の略地図  
（省略）  
兎に角集まり候ものを送り申候 素人の  
かなしさ珍品ありたるやも知らぬと平凡の  
もののみ取り恐れ入候  
区分 1. 水辺ノ草ノ上 2. 樹上  
3. 屋根上 4. 石上  
（裏面）七月三十一日 トン化  
佐藤星明殿 山本黙生  
（封筒裏面）在滿洲敦化 歩兵第十聯隊  
第六中隊 山本茂雄 七月二十九日」

以上が、佐藤清明宛ての手紙文概要であるが、読下しを複数依頼するも、独特の崩し字に意味不明な文面が多数あり、今後の課題となった。迷惑だと言っておきながら結局は、お望み通り植物標本を送っているのである。清明さんの研究への情熱と山本大尉の人柄に敬服する。

山本茂雄の原籍は鳥取県、明治31年生まれで滿洲事変勃発時は33歳である。『陸軍現役将校同相当官実役停年名簿』によると凱旋帰国後の昭和9年8月1日付けで歩兵第十聯隊附となる。叙位及び勲章は、従六位、勲六等瑞宝章、勲五等双光旭日章、功五級金鷄勲章を受章している。なお、戦後における清明さんとの交流や民俗学での業績等は不明であるが、『歩兵第十聯隊史』発刊作業に携わった歩兵第十聯隊史刊行会理事として同氏の名前を確認した。他の理事（元連隊長附きの運転手）宅に電話取材を試みたが、新情報は得られず。何れにせよ山本が書き残した書簡類の一部は、滿州事変の細部を物語る第一次資料であることに間違いない。

## 作曲者松田新治の謎

此処で、作曲者の松田新治との関係に迫っていきたい。松田新治は、明治29年（1896）年1月3日生まれ、本籍は埼玉県である。『文化人名録』昭和三十年版及び『大学研究者・研究題目総覧第1巻』によると徳島県鳴門市在住で日本教育音楽協会徳島県支部長の肩書きを持つとなっており、職歴では天津日本高等女学校教諭、大坂音校助教授、徳島師範教授、徳島大学学芸学部助教授となっている。では、清明さんとの関わりができた昭和初期はどの様な状況だったのだろうか。いろいろ調べてみたが二人の関係が確認できる資料は入手できなかった。

そんな時、里庄町「エヒメアヤメ」自生地調査に清明さんも関係していたことを聞き、



同じく「エヒメアヤメ」自生地で有名な山口県防府市西の浦についての情報も集めてみた。すると「防長新聞」昭和7年2月18日3面にエヒメアヤメ（当時は姫アヤメと呼称）をテーマにした「西の浦小唄」という歌が掲載されていることを知り直ぐに入手した。すると偶然にも、作曲者が「中村高等女学校教諭の松田新治」であった。松田の写真や譜面を求め、現在の私立中村女子高等学校に電話と文書で依頼したところ、同校に昭和4年から昭和7年3月迄音楽教師として勤務したことが分かった。複数の郷土史研究家に尋ねたり、積極的に協力をして頂き、深く感謝するものである。防府市史によると松田の作曲した歌は「とのみ民謡」「中関小唄」ともう1曲、それが「西の浦小唄」であるが、何故かこの歌だけ楽譜がない。このことは現地の西の浦公民館館長に聞いてみたが、調査中との事であった。不思議なことに現地でも「西の浦小唄」を知る人はいないそうである。

その後、里庄町立図書館及び岡山県立図書館のレファレンスにより、松田新治と佐藤清明との関係の一部が明らかになった。松田氏は昭和7年4月にはなんと清明さんの勤務している私立岡山関西中学の音楽教師に着任し、同時にこれもまた清明さんのいる県内の某女学校でも音楽教師として採用されていたのだ。清明さんが「歩兵第十聯隊に送る歌」の作曲を依頼したのはおそらく昭和7年5月頃だと思われるのでまさに二人が同僚となったこの時期と考えられるが、昭和7年から11年の間、松田は岡山市4番町に、清明さんは岡山市内山下に住んでいたことも偶然とは思えないのである。

清明さんは、大正4年から九州の小倉に勤務していたので途中の山口県防府市に、「エヒメアヤメ」の観察で立ち寄る可能性もある。まったくの憶測にすぎないが、松田が何らかの理由で山口県から岡山県の学校へ転勤する際、以前からの知り合いだった清明さんのいる二つの学校、近くの住まいへ移って来たのではないだろうか。そうして、単に音楽教師という立場だけでなく、地元由来の歌や校歌の作曲もする松田に清明さんは作曲を頼み、歌詞の原案作成時に依頼されたとしても、完成までの1~2ヶ月間、気軽に打ち合わせができる間柄であったと推測する。

さて、松田新治は岡山で4年間ほど勤務した後、昭和11年突如として島根県立津和野高校に転勤している。この時40歳になっている松田に何があったのか。まだまだ疑問は尽きない。

## 土居晚翠と佐藤清明

最後は土居晚翠と清明さんの関係に話を戻す。昭和7年当時の晚翠は仙台に住んでいた。清明と面識があったか否かは現段階で不明、妖怪の研究者である清明と心霊学に興味のあった晚翠は何かで繋がっていたのではないか。晚翠は日本心霊科学協会顧問。妻の八枝（ヤツエ）は方言の研究者でもあったことから、研究分野も重なっている。八枝は早逝した息子英一の癩病救済活動を継承しており、岡山県の長島愛生園にも来園（知人2名と）していることが分かり、その時の「同伴者2名」という記録に、飛びついたが、残念ながら清明さん夫妻ではなく八枝さんの友人であった。土井夫妻の6人の子供の内3人は死産で他の3人も20代、30代でそれぞれ他界している。また、養子にも先立たれ、家財は総て空襲で灰となり、昭和23年には妻も死去する。「ゆける子は今 天上と知り乍ら折にふれては 泣かざらめやも」と歌に詠んでいるとおりの悲痛な思いをしながらの人生であったようだ。

清明さんの晚翠宛て書簡が空襲で灰になり、どのような依頼をしたのか知る由もないが、晚翠も人であり、「戦陣訓」の文章校正に関与するなど溢れる教養の一端を示したのではないかと推測する。山本大尉激励の歌詞に心が通じたと言えるであろう。

# 歩兵第十聯隊に送る歌

佐藤星濱 作歌  
松田新治 作曲

元氣に力強く

ノールアサヒノアキツシマ シーズム  
きらめきわたるーにほんたうかはやき

エフヒノダイマンシュウ ニガシトニシニ  
はゆるー丸んたりき るきゆうのころをー

イクヒヤクリ キーミノココウノメイオヒ  
かみしめて ひーびくくこつとますらき

# 歩兵第十聯隊に送る歌

佐藤 星 撰作歌

クガ カケマハシリーシウモクニノタメシ

一、登る朝日の秋津洲  
流む夕日の大満洲  
東と西に幾百里  
君の股肱の命重く  
馳け廻りしも君の爲。

二、きらめき互る日本刀  
かがやき映ゆる聯隊旗  
異郷の土を踏みしめて  
響く靴音 益 荒雄が  
目指す理想の嶺高し。

三、世の興亡に明け暮れて  
風塵遠く凌ぎたつ  
烏城の天守仰ぎつ、  
吉備の平野に鍛へたる  
我が精銳の十聯隊。

四、興安嶺に夜は明けて  
高粱芽ぐむ朝ぼらけ  
義は金鐵の堅うして  
鴻毛輕き我が生命  
消えて果てなむ原の露。

五、平和を願ふ極東を  
太平洋は壽けど  
崑崙崑 幾度か  
吹きては反す南北  
黄河の水は澄みやらす。

六、聖賢の骨 地に泣きて  
道義の鏡 曇りはて  
咆哮遠く風吹けば  
忽ち襲ふ大匪賊  
教へも空し三千年。

七、零下三十冬寒く  
塹壕深き陣營に  
結ぶも難し夜半の夢  
銃聲絶えてまどろめば  
枕邊淡し 父の影。

八、あ、南満の草みどり  
爾靈山下の忠魂碑  
軍の神と祀られし  
その赤心の魂は  
再び咲きぬ紅に。

九、泰山重き君の命  
櫻咲く國春たけて  
南と北に 父と子は  
東亞に春を残すため  
咲きて散りなむ武士の花。

十、天には雲をつんざきて  
爆音高き愛國機  
地には歴史の色染めて  
總のみ残す聯隊旗  
三たび旭日に匂ふかな。

# 三徳園の‘菊桜’植樹について

稲田多佳子

## 三徳園とは

ニュース、新聞などで「緑色の桜」のことを見たことはないでしょうか。岡山市竹原にある三徳園は数年前まで「緑色の桜 御衣黄の見られる桜の名所」などとして頻繁に紹介されていました。また、園内には、大面積に岡山県下の植生を再現した「郷土樹木園」があり、地域の人の憩いの場となっていました。



三徳園は、岡山県出身で第一生命創業者である矢野恒太氏が、地域の人々の為に作った農民学校「三徳塾」が始まりでした。その後「三徳塾」は県に寄贈され、農業研修所として数多くの篤農家を輩出してきましたが、農業の大規模化に伴い昭和43年、その役目を農業大学校（現赤磐市）に譲り、跡地が「岡山県青少年農林文化センター三徳園」として整備されることになりました。園の周囲には「小鳥の森」という遊歩道が作られ、小鳥の餌になる植物も植えられました。

昭和43年5月、開園直後の愛鳥週間には常陸宮ご夫妻がご臨席し、記念植樹もされました。昔の農機具や養蚕道具などを展示した「農業展示館」は、明治時代に建てられた高松農学校の校舎を移築したもので、畑の跡には岡山県下の代表的な植生を表わすような、展示林としての「郷土樹木園」や、珍しい桜の数々が植えられた「桜展示園」など、当初は根付くのか心配されたものの、樹々は立派に成長し、野鳥をはじめとして多くの生物と畑が共存した農業公園となりました。

平成29年、約50年経った園内に整備の計画がされ、郷土樹木園の半分のエリアに新たな研修交流館が建ち、実習用の圃場も整備され、半分は公園、半分が農業研修施設になりました。

## 三徳園と‘菊桜’

その三徳園には、かつて‘菊桜’が植えられていたのです。苗木は佐藤清明さんの自宅の‘菊桜’から林業試験場で育成されたものとされ、詳細は、清明さんと交流のあった難波早苗氏の講演要旨として『岡山の自然と文化 第11号』に記されています。

その後、時期は不明ですが三徳園の‘菊桜’は枯死したようでした。





## リニューアルからの繋がり

平成 29 年の夏、岡山県職員として畜産の普及指導の仕事をしていた私は、知人の Facebook から偶然三徳園のリニューアル工事のことを知りました。樹齢 50 年の貴重な木々の大半が伐採される計画で、昆虫や野鳥など多様な生物の生息地を失うと知った人たちが県に対して計画の経緯や説明を求めようと活動をしていました。

私はその代表の方と偶然知り合いになり、始めにお願いされたのが、「三徳園の郷土樹木園を作った人のことを教えて欲しい。あの森を計画した人はすごい人だと思うから。」ということでした。県職員とはいえ私は三徳園のことはよく知らなかったのですが、県立図書館で資料を探すと、三徳園の郷土樹木園に植える樹種を選定したり、管理に関わっていたのが岡山県の農業普及員の大先輩で植物研究者でもある難波早苗氏だと分かりました。その時、前述の『岡山の自然と文化 第 11 号』から、佐藤清明さんの‘菊桜’の事を知ったのです。

佐藤清明さんのことをネットで検索すると、ちょうど里庄町立図書館で「せいめいさん展」が開催されていました。ここに行けば何か分かるに違いないと、早速図書館に行き、展示された資料の中に難波早苗氏の名前を発見しました。図書館の司書小野さんに尋ねてみたところ、「菊桜や佐藤清明さんに興味があるのでしたら、会を立ち上げようとしてますので参加されませんか？」とお誘いを受けたのでした。それが私が清明研究会に参加するきっかけでした。

清明研究会に参加して昔の資料を見たり顧問の先生たちの発表から学ぶにつれ、三徳園の郷土樹木園には清明さんが戦前から交流していた植物研究家吉野善介氏が新種として発見した植物があったり、岡山県の植物研究者の繋がりを通じ、各所から失われそうな貴重な植物を集めて植えられていたということが分かってきました。

## ‘菊桜’を三徳園に

私は、三徳園のリニューアル工事を契機として結成された市民グループ、「小鳥の森・三徳園を愛する会」（後田竹次郎会長）にも参加し、その後前任の方から会長を引き継がせて頂きました。そして会員の方の協力により、年に数回郷土樹木園で自然観察を行ったり、学習会などで郷土樹木園の成り立ちや、佐藤清明さんや岡山県下の植物研究者の交流について紹介してきました。

私は、菊桜の数奇な運命、皇室や池田厚子様とのご縁、佐藤清明さんの話や岡山県下の植物研究者のネットワーク、三徳園の成り立ちなどを知っていくうちに、‘菊桜’をもっと増やしたい、そして三徳園にも植えられたらと思うようになりました。

そこで清明研究会の生宗副会長にお願いし、岡山大学の樹勢回復作業や里庄町歴史民俗資料館での記念植樹、高岡神社での植樹などにご同行させてもらい、樹木医の國忠先生に色々と教えて頂きました。すると大変ありがたいことに國忠先生から 2 本の苗を譲って頂けることになりました。三徳園の園長さんにも‘菊桜’の植樹をご快諾頂き、職員の方が芝生広場に植樹の場所を整備してくれ、植樹用のスコップ、資材なども貸して頂けることになりました。本当にたくさんの方の協力により、再び三徳園に‘菊桜’が植えられることになりました。

## 記念植樹

令和 2 年 2 月 24 日、小鳥の森・三徳園を愛する会の会員の方と菊桜の記念植樹を行いました。新型コロナの広がりが危惧されている頃でしたが岡山ではまだ発生は無

く、無事に終えることができ、本当にほっとしました。

その後、新型コロナによる行動制限や三徳園の休園等もあり、私は様子を見に行くこともままならなかったのですが、三徳園の職員の方や三徳園の近くに住む方にも見守って頂き、虫に食われたり強風に遭ったりしながらも、なんとか無事に根付きました。

## 看板設置

移植から2年経った本年4月に待望の花が一輪開花しました。4月30日には、里庄から清明研究会の皆様にも来て頂き、小鳥の森・三徳園を愛する会の三宅茂子さん手作りの「菊桜の看板」を設置しました。美しいのぼりを見た来園者の方も関心を持ってくださいました。

今年は厳しい夏や台風もありましたが、なんとか乗り越えましたので、来年には更にたくさんの花を咲かせて欲しいです。そして、三徳園に来園する多くの人に‘菊桜’の素晴らしさを知ってもらい、末永く愛され、‘ふるさとの桜’のような存在になることを願っています。

最後に、紙面の都合上、全ての方の御名前を記載できず申し訳ありませんが、‘菊桜’植樹にお力を頂いた皆様に心からの感謝を申し上げます。



苗の植樹（令和2年2月24日）



看板設置（令和4年4月30日）

### 矢野恒太翁 と 三徳園

矢野恒太は、慶応元年12月2日 備前国上道郡角山村(現岡山市東区)に生まれ、第三高等学校医学部(現：岡山大学医学部)に学び、日本生命入社、診査医となる。後、農商務省勤務(初代保険課長)等を経て、第一生命設立、後に会長。その間、東京横浜電鉄(現・東急電鉄)・目蒲電鉄社長として鉄道経営にも関わる。

矢野は、農業の振興に深い関心を寄せており、農村子弟に実際に即した農業知識を授けたいとして、昭和9年、郷土岡山県上道町に農民道場として「三徳塾」を設立。昭和19年には、同県植月村に「三徳塾分場」を開設した。

これらの施設は、「岡山県青少年農林文化センター三徳園」及び「小鳥の森公園」として、また分場は「岡山県農林水産総合センター森林研究所」として、岡山県に引き継がれ、今日に至る。 … (公財)矢野恒太記念会 HP 引用 …



## 横溝熊市顕彰展示

里庄町歴史民俗資料館事業 2021.12/5・12/19・2022.1/16



「横溝コレクション」の内、腊葉標本・田代善太郎博士からの書簡等展示

横溝熊市は、薬種商を営み、石鎚講の導師や消防団活動の傍ら、町域を中心に植物・鉱物の採集をし「薬用植物目録」等を発行。昭和初期から写真機を所有し、「里庄名所繪葉書」を発行。また、里庄町町誌(s.26)・里庄町誌(s.46)・里庄の今昔(s.50)に提供した写真は、里庄の歴史史料として貴重。展示した標本を含め、歴史民俗資料館で保管されていた腊葉標本は、この展示を機に倉敷自然史博物館に移管される。

## 岡山文庫「佐藤清明の世界」刊行記念講演会

2022.5/5 TSUTAYA Z 岡南店

主催：日本文教出版株式会社

**岡山に棲む妖怪たち**  
岡山文庫『佐藤清明の世界』刊行記念講演会

会場：TSUTAYA AZ 岡南店内学習塾  
日程：5月5日（木）開場 13:30 | 開演 14:00  
料金：無料  
参加申込＆問い合わせ先：TSUTAYA AZ 岡南店 又は 日本文教出版株式会社  
TEL 086-252-3175（平日 9:00～17:00）  
Mail bunkyo@okayama.email.ne.jp

登壇者 木下浩  
昭和42年生まれ。平成2年東京学芸大学卒業、岡山県教員として勤務。平成10年岡山県立博物館に学芸員として勤務。現在は岡山県立博物館所長高栗生田史朗学芸員。また岡山大学医学部客員研究員・中尾隆史資料館主任研究員も兼務。岡山民俗学会理事として執筆活動に携わる。平成22年（第37編）岡山市文化史調査委員。  
2021年、岡山文庫「妖怪学 佐藤清明の世界」を刊行。



当会顧問・岡山民俗学会理事で、この度の岡山文庫「佐藤清明の世界」発行を牽引された木下浩氏が講師を務められ、県内近隣から、会場一杯の30余名が参加。質疑の内容から参加者の熱が伝わってきた。

当会からは、生宗脩一副会長、事務局の佐藤健治と小野礼子、会報担当の佐藤泰徳の4名参加。（ポスター画像：主催者提供）

# 里庄のせいめいさん展

2022.7/1～8/29 里庄町立図書館

## ① 民俗分科会 「ここまで分かった“歩兵第10連隊に送る歌”の謎！」



展示の趣旨・詳細は、本号 p.2～7 「巻頭論考」 参照

## ② 植物・動物分科会「虚空蔵公園の植生の観察」

動物・植物分科会の活動として昨年12月より虚空蔵公園（元里庄町美しい森）の現在の植生（フローラ）を観察しようということで、これまで3回観察会を実施しました。その様子を報告します。

虚空蔵公園は里庄町美しい森（平成7年整備完了・平成31年3月閉園）の前から里庄町が管理していた場所です。最近では残念ながら余り管理されていないようです。

佐藤清明と安原清隆が「里庄町の湿原フローラ」（昭和57年・1982）という題で岡山県植物研究会誌に寄稿した調査記録がある。まず、現在の様子を記録することを第一目標とし、次に、その当時の植生（湿原フローラ）と比較することで、環境の変化による植生の違いなどの観察を続けたい。



今回の調査で、絶滅が心配されているイシモチソウ・ハッチョウトンボ等が見られたことは特筆に値する。佐藤と安原による調査論文は、会報1号に再掲。



2021年12月18日(土) 9:00~12:00 晴 参加者7名

- ・コシダ(多い)      ・ウラジロ(限定的)      ・ベニシダ      ・ホラシノブ      □ソヨゴ
- ナナミノキ      □クロガネモチ      □フサアカシヤ(林道沿い)      ・その他

2022年4月16日(土) 9:00~12:00 晴 参加者5名

- ・カンサイタンポポ      ・イシモチソウ      ・モウセンゴケ      ・ナガバノタチツボスミレ
- ・スミレ      ・コナラ      ・ウバメガシ      ・カスミザクラ(夏白い花)
- コツクバナエツギ      □ミツバアケビ      □コバノミツバツツジ      □ミヤマガズミ      □モチノキ
- クサアカシヤ      ・その他

2022年5月28日(土) 9:00~12:00 晴 参加者7名

- ・テリハノイバラ      ・ノイバラ      ・ニガナ      ・オニタビラコ      ・サルトリイバラ
- ・ヘビイチゴ      ・ノアザミ      ・ヒメジョオン      ・ユウゲショウ      ・シャリンバイ
- ・ヤブソテツ      ・イノモトソウ      ・シナダレスズメガヤ      ・クサイチゴ      ・オッタチカタバミ
- ・ニワゼキショウ      ・マツバウンラン      ・イシモチソウ      ・ソクシンラン      ・モウセンゴケ
- ネジキ      □トリモチ      □コツクバナエツギ      □ナツハゼ(ヤマナスビ)
- ルリタテハ幼虫      ○ドクガ幼虫      ○クロイトトンボ      ○ハラカラトンボ      ○ハッチョウトンボ
- シオカラトンボ      ・その他



イシモチソウ



ハッチョウトンボ

### ③ 天然記念物・文化財分科会

チーム SEIMEI・21人のサムライによる大事業「天然記念物緊急調査」



天然記念物保護の立場から、文化庁による天然記念物緊急調査が昭和42年から47年(1967~72)にかけて実施された。岡山県では、その初年度に佐藤清明のもとで調査活動が行われることになった。

この調査は、各種開発が進み、学術上貴重な種が急速に消滅しつつある中で、地球上の食料生産の基礎を明らかにしようとした国際生物学事業計画(1965~74)が実施されるに当たり、緊急調査として全国規模で展開されたものである。

調査は、岡山県全体をカバーするに必要な国土地理院の地形図(5万分の1)31枚分の範囲について、佐藤清明のもとで、県下各地在住20名の地区担当者を決め総勢21名の総力を結集して行われた。

徳山鏡也・押柄慎吾・井上立・難波早苗・高山敬三・岳山利夫・本位田隣太(美作地域)、加藤豊・光畑之彦・福島和彦・花田親兵衛・大久保一治・成瀬寛(備前地域)、小坂弘・中村順平・三宅一喜・堀口正志・中島義行(後、渡辺姓)・花田起志平・原田昭子(備中地域)

5月に通達され、組織作りを経て、8月初め担当者・諸準備、9月精査開始、12月上旬に担当者総会を開催して進捗状況を把握、2月末清写作業開始、3月中旬植生図着色完成...と僅か1年の間に、現地での調査から植生図の作成まで行われたことには驚かされる。



チーム SEIMEI 21 人のサムライたち (S43.3.まきび荘)・植生図清写作業風景・岡山県植生図

## <編集後記>

今号では、佐藤清明の博物学者の枠を越えた幅広い活動の一つ『歩兵第十聯隊に送る歌』の背景にあるものについて、また時空を越えて、かつて清明が菊桜を植え、今その姿を見ることができなくなった県有施設の中に、孫にあたる菊桜の苗を植樹するに至った経緯について、お二人の方に新型コロナウイルスの蔓延下において、じっくりと取り組まれた成果をご披露頂きました。

また、この春から、倉敷自然史博物館・里庄町立図書館・佐藤清明資料保存会が相携えて展開している「動物妖怪展・講演会“博物学者荒俣宏、妖怪を語る～この世に存在した...らしい妖怪たち～”・妖怪本紹介“妖怪大集合 ～あやかしの世界へようこそ～”・おはなし会“妖怪の世界～あなたのそばに、いる・かも？”」については、一連の事業終了後にご執筆頂けることを願っております。

また、キクザクラ基金は、福武教育文化振興財団による活動助成金にともない、菊桜育成保存会と改称し、今まで以上に精力的に活動が展開されています。このように、広がりを持ってきた活動を「会報」で網羅することは難しくなりましたが、佐藤清明特設サイト・インスタグラムと棲み分けながら、その使命を果たしていきたいと考えております。  
(会報担当 佐藤泰徳)



佐藤清明顕彰特設サイト



佐藤清明資料保存会会報 No. 9

発行日 令和4年11月19日  
発行者 佐藤清明資料保存会・里庄町立図書館  
会長 加藤泰久(里庄町長) 館長 高田正信  
住 所 719-0301 岡山県浅口郡里庄町里見 2621  
電 話 0865-64-6016

ホームページ : <http://www.slnet.town.satosho.okayama.jp>  
Eメール : [slnet@slnet.town.satosho.okayama.jp](mailto:slnet@slnet.town.satosho.okayama.jp)